

どうよかつたなどと、座談の中に（叔父二人も好きなの
で叔父相手によく語つてゐたことがあるが）よく話が出
てゐたものである。

こんなに急に逝くなるならば、いろいろ聽いて筆録も
しておきたいことが多かつたと悔まれる。

「淨瑠璃雜誌」については、同人故森下辰之助氏が、樋
口氏に應援され、若い世代の識見高い人々を多く推薦さ
れて以來、森下氏とは舊くからの親友であつた父も、同
人に加つて、森下氏があんなに急に逝かれて以來、特に
及ばずながら力を入れてゐた様子であり、又最近誌面も
ぐんぐんよくなつて來たので、非常にそれを樂みにして
ゐたのであつた。

手紙などまことに筆まめであつたが、原稿など習慣的
にあまり書き慣れてゐなかつたので、はじめて最近、こ
の方面では、處女稿にも近い「近代淨瑠璃巨匠私見」を
書いたのを、私自身も嬉しく思ひ、その反響が多少よけ
れば自信を得て、今後いろいろ書くであらうと期待して
ゐたのに、それさへ完了せず、二回きりで、突如腦溢血
で去つてしまつたのは、血肉の至情としても、まことに
残り惜しい。

悔みに來ていただいたの方々も云つて下さるやうに
父は謙讓圓滿な性格で、私たち兄弟も幼い頃から父に強

く叱責された記憶を殆んど一度も持つてゐないくらゐで
あつたが、趣味の上の好惡はかなりハッキリしてゐて、
特に義大夫に關してはさうであつた。

現在の人では古軼大夫を最も彫琢洗鍊された巨匠と觀
て、その精進を尊敬し大成を望みとしてゐる「近代淨曲巨
匠私見」の結論にもそれを書かうとしてゐたと思はれる
それだけにそれを書き終へず、又來年一月の古軼の櫓
下披露興行もきかずに突然逝つたことなども、私たちが
今残念に思ふことの一つである。

ともあれ、父も最後のギリギリまで關心をもち、その
成長發展を樂みにしてゐた「淨瑠璃雜誌」が、幸ひすぐ
れた若い編輯スタッフと高名な先覺者たる同人の方々に
恵まれてゐるので、今後一層發展されんことを、只管期
待し、祈つてやまない次第である。（十六・十一・二十一）

辻部圓三郎氏略歴

一、明治十三年一月廿六日 森久吉の長男として大阪府中河内
郡盾津村新庄四十番屋敷に生る。

一、明治廿七年三月 大阪府中河内郡中河高等小學校卒業、同
窓の親友木村敦壽氏の令兄の推挽により、年若く就職、爾後
學校に進まざりしも、漢籍、詩文、國史等に興味をもち獨學
にて研鑽す。

一、明治廿八年十月 日本生命保險株式會社入社。

一、明治卅七年二月 大阪市東區大手通三丁目五十二番地辻部

エツと養子縁組成る。辻部八重と結婚。

一、明治卅八年十一月 長子出生、引つゞき三男子を儲く。
その後淨土眞宗の信仰に入る。

一、大正二年六月 故中谷德恭氏、故岡本増次郎氏、故森下辰之助氏等と共に、主として知識階級の間に淨土眞宗の信仰を宣揚せんとして「一味會」を創立、爾來、雜誌「一味」を發行す。

「一味」は現在第三十二卷第十一號を發行、通卷三百八十號に及ぶ。

一、大正十三年一月 故利井鮮明師によりて創立されたる「行信敎校」(大阪府三島郡如是村東五百住)を基礎とし、淨土眞宗の信仰を基調とせる「專精會」を創立、會長利井興隆師等を扶け、以降會計事務その他に專任。

一、大正十五年二月 「一味會」常設會場として永田駒三郎氏、天王寺に「春風莊」を建築落成、以降そこに移りて講演會を續く。

一、大正十五年十一月 芦屋山角に轉居。

一、昭和二年六月 伊藤長兵衛氏の發意による財團法人芦屋佛敎會館創立、理事に就任。

一、昭和七年三月 日本生命保險株式會社を退社。同社にては主計課、保全課、會計課、親榮課助役等に歴任、勤續三十八年。

一、昭和十四年十月 「淨瑠璃雜誌」同人に參加、同誌發展に貢

献す。

一、昭和十六年十一月四日午後六時四十分逝去、越えて七日芦屋佛敎會館に於て告別式執行、享年六十二歳。

なほ晩年に於いては、隣保班、町内會、軍人援護會等の公共事業に役員として盡瘁す。

寄稿の一部 (最近のもの)

「故正信院鈴木啓基先生追悼、學匠としての面影」(「一味」三十一卷五月號)

「秋と死」(「一味」三十一卷十一月號)

「岡本翁を悼む」(「一味」三十一卷十二月號) 以上昭和十五年

「近代淨曲巨匠私見」(一)(「淨瑠璃雜誌」四〇三號)(昭和十六年十月號) 同(二)(四〇四號)(昭和十六年十一月號) 以上昭和十六年

以
上

